

医療スタッフにいま一番欠けている、医療現場での良好なコミュニケーションのために必読のロードマップ

伊藤眞一 Ito, Shinichi

全国臨床糖尿病医会

筆者は開業以来 35 年間糖尿病専門クリニックで糖尿病患者さんを診る傍ら、週 1 回地域基幹病院である武蔵野赤十字病院で糖尿病外来を行っている。自宅クリニックでは古典的な糖尿病外来を行っているが、病院では電子カルテを記載しながらの現代風の外来も行なっている。

最近多くの患者さんとの会話のやりとりのなかで筆者が一番気になることは、他院に紹介した患者さんのなかには、紹介先の医療者スタッフから患者さん自身の不安を解消してくれる会話が聞かえないのがっかりしたという不満をもつ方が多いことである。その問題点の解消のため、自分自身も含め医療側のコミュニケーションをレベルアップする必要性を日頃痛感していた、そんな折りに本書を読む機会を得た。

本書の筆者である日下隼人先生は筆者とは学生時代からの付き合いがある。卒後 10 年して、武蔵野赤十字でともに仕事をする事になり再会したのだが、当時日下先生は小児血液のスペシャリストとして辣腕を振るっておられた。小児科患者さんの母親のあいだでは、どんな深夜で

も病院にいて、いつでも診察してくれる先生として有名であった。青年医師の頃から患者さんの希望にそった医療を実践しておられるのだなあとは筆者は感心していたのを思い出す。

武蔵野赤十字病院時代の後半は副院長として病院経営に参画するのと並行して、教育研修推進室長として大活躍されていた。当病院は大学病院を含む全国人気臨床研修病院として常に上位に位置し有名であるが、日下先生の医学教育への情熱による功績が人気病院の一因と筆者は思っている。現在医学教育分野ではコミュニケーションが重要視され、多くの大学や医療施設で、その対策が実践されている。日下先生のその有効な方策として「模擬患者さんとの医療面接の演習」を行い、大好評を博し多くの施設で講演されていると聞いていた。

本書は、医療者のあるべき立ち居振る舞い、患者さんの話の聞きかた、雰囲気や和らげる言葉、在宅医療の現場の対応まで、医療者がさまざまな状況で遭遇するであろう 52 場面を設定した構成になっている。たとえば「話を聴く姿勢」の項をみると、



『医療者の心を贈る
コミュニケーション
—患者さんと一緒に歩きたい—』

日下隼人 著

医歯薬出版 発行
定価（本体 1,800 円＋税）

冒頭に Aphorism として、“自分に対して肯定的な態度を取っていない人に、人は自分のことを話そうとは思いません。”とあり、以下に①体を向ける、近づく、触れる、②目は口ほどにものを言う、③表情 微笑み、④マスクは要注意、⑤心は手に表れる、⑥電子カルテと 6 つの見出しを掲げ、それぞれに簡潔な解説が加えられている。筆者が日頃漠然と考えていた“なすべきこと”がもの見事に述べられており、内心「そのとおり」と叫んでしまった。ただマスクの件は知らなかったので、早速診療姿勢を変更することにした。

本書はどの医療スタッフにも読んでいただきたい名著なので、強く推奨した次第である。